

海・川・湖 その世界とのふれあい

マリンスノー

MARINE SNOW

No. 9
1989.2.



● 目次

コツメカワウソ	トピックス.....	4
飼育レポート..... 1	催し物.....	5
第3回図画展の開催..... 3	浅虫の海の生き物達(9)..... 6	
「青森県さかな博物誌」 の出版... 3	浅虫水族館日誌抄録..... 6	
	動物紳士録..... 7	

青森県営浅虫水族館

コツメカワウソ飼育レポート

阿部 恵一

当館では、1988年7月からコツメカワウソの飼育展示を開始しました。コツメカワウソは、東南アジアやインドなどの淡水域に生息しています。

カワウソの仲間は分類的には、食肉目イタチ科に属し、Davis (1978) によると世界中に9種分布しているとされていますが、まだはっきり分らない部分もあるようです。カワウソ属の仲間は、そのほとんどが淡水域を中心とした地域に生息していますが、中にはラッコやウミウソのように海を生活圏とする仲間もいます。

当館で今回飼育を開始したコツメカワウソは、カワウソの仲間でも小型の種類で、頭胴長が40~50cm、体重は3~5kg程です。尻尾は25~30cm程の長さで、基部は太く先端に向って細くなっています。手や足にはみずかきがあり、水中を泳ぎ回るのに役立っています。手足の指先には退化した小さな爪があり、これが名前の由来になっているようです。頭部は扁平で耳は小さく、胴長短足の体型をしています。体色は全体的に茶褐色で、頸から胸にかけて灰色がかっています。毛皮はつやが有り、なめらかでいかにも良質な感じがします。

当館では雄2頭、雌4頭の合計6頭を飼育していますが、現在展示しているのは雄2頭、雌3頭の合計5頭です。残りの雌1頭については、他個体との折合いが悪いため、単独でケージに収容し飼育しています。展示している5頭についても、当初は一緒に飼育していたのですが、雄同士あるいは雌同士の闘争が見られるようになったため、やむなく展示室を2室に仕切り雌雄1頭ずつと、雄1頭雌2頭の2グループに分けて展示しています。これらは通常では一緒に飼育していても特に争いをすることなく、むしろ睡眠をとる時などは一塊りになっているのですが、発情の時期になると争いが著しくなり、互いにひどく傷つけ合う事がしばしばでした。発情はおよそ1ヶ月に一度ありますから、最初から分けておいた方が良い結果が得られるように思われます。

餌料は冷凍アジを主に使用し、その他ホッケ、



搬入直後(この穴は何かな?)

イカナゴ、活ドジョウなども時折与えていますが、何でも良く摂食します。ただ、餌料の品質が悪いと下痢をしたり、嘔吐が見られたりするため、なるべく鮮度の良いものを与えるようにしています。

給餌料は1頭当たり1日に400~500g程度を目安に、その日の食欲や摂食状態を見ながら3~4回に分けて与えています。

ほとんどの場合、餌の魚は尻尾の方から食べます。それも骨ごと細かに噛みくだいて摂食し、ホッケのような頭骨の大きい魚でも残さず食べてしまします。イルカやアシカなどのように丸ごとのみ込んでしまうような事はせず、ていねいに噛んで摂食します。

餌料は十分に与えているつもりなのですが、少し空腹を感じ始めると何でもかじって食べ始めます。木材をかじってみたり、ディスプレー用の擬草をひきちぎって食べてしまったりします。おかげで展示開始当初はきれいだった展示室も今では、ディスプレーも少なくなってしまい少しそうばらしくなってしまいました。

カワウソは非常に好奇心が旺盛で、何にでもす



好物の魚をしっかりと手に持ち食べる

ぐ興味を示します。見慣れない物を展示室の中に入れておくと、そろそろと寄ってきて臭いをかぎ、手で触れてみて安全なものだと解ると遊び道具にしてしまいます。いろいろな道具を入れてみましたが、バスケットボールのような大きな物ではほとんど遊びませんでした。軟式の野球のボールは手にかかえてかじってみたりして遊んでいましたが、半日程度で飽きました。ピンポン玉は好評で、手に持つて水中に潜るとスルリと逃げてしまうものですから割合あきずに遊んでいるのですが、噛み始めるとすぐにこわれてしまいます。こわしてしまうだけなら新しいピンポン玉を補充してやればすむのですが、こわした破片を食べ始めたためこれも中止しました。次に塩化ビニール製のパイプ類を入れてみたところ、これでも良く遊びます。長いパイプを2頭でひっぱり合いをしたり、パイプの穴に手を入れてみたり、小さなものは手に持つてくるくる回してみたりします。もちろん例にもれずかじるのですが、硬いパイプですから破損したり、のみ込んでしまう事もなく比較的安全な遊び道具になっています。

観客の人気も上々で、活動しているカワウソを見ているとなかなかあきない様子で長時間立ち止って見ている人が多く見られます。あどけない顔に短足胴長の体型がとても親しみやすいと感じているのは私だけではないようです。その体は柔軟で、かなり狭い所に入っても方向を変える事ができ、それでいて全身バネのような強靱さを備えています。頸の力も非常に強く、噛まれるとかなりの深手を覚悟しなければなりません。しかし、普段は決して狂暴ではなく、むしろ人によく慣れま



お気に入りの人工芝で一休み

す。ただ、空腹時だけは別で、欲求を態度で示してきます。彼らの朝食前に飼育舎の清掃をする時は、少し油断すると、足元に噛みついてくる事もしばしば有り、ゴム長靴などは穴だらけになってしまいます。なにしろ、空腹時の彼らは恐しく殺氣立っており、係員を見かけるといっせいにかけ寄って来て、追い払っても逃げる事を知らず、身をひる返してゴム長にくらいつき、ふり回し、不満を訴えます。このため、飼育展示室の清掃をする時は、先に食べ物を与えておき、摂餌しているスキにあわてて掃除をするといった具合です。一度、清掃に少し手間だった事がありました。気がつくと、カワウソ達はすっかり餌を食べつくしてしまっていていつの間にか取り囲むようにして餌をもっとねだっています。これはまずいと思いつつ、デッキブラシなどで追い払ったのですが、一頭が手に持っていた空の餌バケツに飛びつき、バケツの中に頭をつつ込みました。ところが中に何もないと知ると今度は手をおもいきり噛んで逃げていったのです。ただただあきれて、おこる気もしません。噛まれた方のミスとあきらめました。

コツメカワウソの飼育を開始して約半年。これからまたどんな事がおこるやら不安はありますが、二世の誕生を期待しつつ、楽しい飼育展示を続けていきたいと考えています。

引用文献

Davis, J. A. (1978) 'A classification of otters' in N. Duplaix (ed.), *Otters: Proceedings of the First Meeting of the Otter Specialist Group*, IUCN, Morges, pp. 14-33



水中を泳ぐのは大得意

第3回「图画展」の開催

松 山 義 昭

「みんなピカソだよ、天才だよ」床いっぱいに並べられた作品を見ながら、審査員が選考会場で言った言葉です。この言葉が印象的で脳裏に焼きています。どの作品も「ピカソ」にひけをとらないほど力強く、楽しく、そしてなによりもすばらしい創造力に満ちています。

どんな勉強ぎらいの子どもでも、その胸の片隅には「絵ごころ」が潜んでいるはずだと思います。美しい色を見て感動し、何かを見て不思議な形だと感じる。もっと近くで見たい、もっと知りたいと思う。そんな心にひびく形や色を子供たちは五感のすべてをつかって感じとり、それを画用紙いっぱいに表現しているのだと思います。展示会場に入ると、子どもたちの感動が大迫力でせまつてきて、思わず押しつぶされそうな気がします。私たち大人が遠い昔になくなしたものももう一度あたえてくれるような作品が展示会場にあふれ、見る人たちに感動をあたえってくれます。

回を重ねるたびに作品の応募総数も増し、今回は最高の47園校、1,679点の作品の応募があり、館長賞2名、金賞28名、銀賞40名、銅賞60名、佳作90名となりました。楽しい作品をいっぱい応募してくれてほんとうにありがとうございました。今年もまた「豆ピカソ」からの作品を楽しみに待っています。

「青森県さかな博物誌」の出版

当館の初代館長、日下部元慰智氏が、昭和60年から約2年半にわたり、東奥日報誌上に連載をされた、「さかな博物誌」を、一冊にまとめた、「青森県さかな博物誌」が昭和64年6月に東奥日報社より発刊されました。青森県に關係の深い魚介藻類や、水族館の魚達を、生物学、水産学、歴史、民俗学など、あらゆる角度から博物学的にとらえまた、青森県の水産と人とのかかわりについても書かれており大変楽しく勉強になる本です。

7月5日には、県水産部部長、米沢俊次氏らを発起人とする、出版記念祝賀会が開かれ、山内善

館 長 賞

「カニさん大好き」

はらた ようこ

(3才)

西津軽郡森田村

床舞保育所



審査員評・カニの甲羅が自分の顔になっている。

そこが楽しい。

- だいだい（橙色）が美しいのは、うすい水色のバックと、甲羅のコゲ茶との調和がとれているからである。
- 幼児らしいほのぼのとした、楽しい絵である。

館 長 賞

「イルカショー」

ふるや ゆみこ

(1年生)

青森市浦町小学校



審査員評・中心のイルカの飛んでいる形が、いきいきとして力強い。

- わざかに見える水の色が、絵を楽しくしている。
- 子供とイルカが、大小のコントラストなして絵を豊かにしている。



祝賀会会場にて、前列右から4人が日下部氏郎副知事を始め約百人が出席し盛大に行われました。

「青森県さかな博物誌」B6版378ページ
東奥日報社

トピックス

ショーの主役、カマイルカのカール！

昨年10月8日に、ショーイルカの仲間入りをしたカマイルカのカール君は、ショーの主役で頑張っています。

カマイルカをショーポールに入れると、バンドウイルカは、ビックリした様子で、気にはしながら遠くを泳ぎ回り、近付くと逃げ回るというように他のイルカとの調和がうまく取れませんでした。それでも1週間もすると落ち着き、ショーでは水平ジャンプ、ハードル、輪ぐりとジャンプ類を中心に、個々の技も安定し、切れの良いスピードイーな動きで、軽々とこなしているようです。黒



と白のコントラストのはっきりした体がとても美しく、目を引かれます。これからも訓練を続け種目を増やし、皆様に楽しんでいただけるよう頑張りたいと思います。
(工藤 秀仁)

水族館技術者研究会全国大会の開催について

第33回水族館技術者研究会全国大会が昭和63年10月26日、27日の両日青森市浅虫に於いて開催されました。

この研究会は日本動物園水族館協会の主催で毎年全国の各水族館の持ち廻りで開催されているもので全国の水族館技術者の研究発表の場であり意見交換の場でもあります。

今回は33回目を迎えた北は北海道から南は沖縄までの45園館70名の参加があり水族館等の技術者が日常の水族館業務の傍ら研究した21演題について



の発表がありました。

その内容は、広い分野にわたっており、魚類に関するもの9演題、施設に関するものが夫々2演題、その他4演題となっており貴重な研究発表ばかりで熱心な質疑応答があり大変有意義な研究会となりました。
(千葉 熙)

「ハタハタ」の搬入

ハタハタと聞けば「秋田名物八森ハタハタ」と秋田音頭をつい口ずさんでしまうほど秋田県とはなじみの深い魚でした。それが昭和51年以降は不漁続きで、今では「幻の魚」と呼ばれるようになってしまいました。昭和63年12月21日、秋田県男鹿水族館の御厚意により、ハタハタを約100尾搬入することが出来ました。ハタハタは北海道の一部を除く海域と、東北および山陰地方以北の日本に分布しており、普段は水深200～400mの砂泥底に生息しています。初冬の頃になると海岸に

大群で押し寄せ、ホンダワラなどに卵を産み付けます。この卵が「ブリコ」と呼ば



れ歯ざわりが良く大変美味です。現在、資源回復をめざし各研究機関で、生態の究明や放流事業などが行われ、ハタハタ復活の日が少しづつ近づいています。微力ながら私たち飼育員も、ハタハタ復活に少しでも役に立てるよう、飼育展示を行っていきたいと思います。
(太田 守信)

催し物

開館5周年を迎えて

昭和63年7月23日(土)午前11時から水族館開館5周年記念式典を当水族館入口において華々しく挙行しました。

当日は、県、県議会、公営企業局、元水族館関係者、地元水族館関係者等60数名を招待しました。式典は、知事代理の藤川水納長の挨拶があり、続いて県議会議長（代理）の祝辞、そして、祝電が披露されました。次に、浅虫小学校6年生の田中良和君に1日館長の辞令を交付しました。続いて知事、県会議長、市長、浅虫温泉町会長、1日館長の5人によりくす玉が割られ、同時に賑やかに

花火が打ち上げられました。そして、浅虫小学校4.5.6年生総員74名による鼓笛隊



の合奏が行われました。この後、来賓者を館内に案内し、県の魚に指定された大型ヒラメの公開、東南アジアから搬入したコツメカワウソの除幕が行われました。

(伊藤 勝成)

入館者200万人達成!!

開館5周年を迎えた昭和63年8月12日、入館者200万人目を達成することができました。

青森市で行われた青函博覧会の影響か、県外からの来館者が多く目につくなかった、この幸運なお客様は群馬県から親子4人で来県された中島義和さん御一家でした。

その瞬間を待ち構えているマスコミのライトを浴びながら、認定証と記念品を受け、マスコミからのインタビューに答えていました。この意外な出来事は、この家族にとって生涯忘れられない思

い出となることでしょう。

観光客を歓迎する水族館にとっては、節目、節目は大事であり、今後も300万人目が早い機会に達成できるよう、心を新たにして、来館者に親しまれる水族館づくりに励みたいものだと思います。

入館者200万人
達成!!
青森県営浅虫水族



(平川 和良)

「水族館探険デー」の開催

10月8日から10日まで、生物教室を中心とした「水族館探険デー」を開催しました。

「スルメイカ」をテーマとした生物教室では、小学生が、イカの種類や体の構造、エサの食べ方、泳ぎ方などの説明を受けた後、解剖にとりかかり、一つ一つ確かめるように丁寧に観察していました。又、スルメイカの餌づけもを行い、水族館ならではの経験に歓声をあげていました。子供達が、生きものに親しみながら、その大きさを理解してくれるよう、今後も、水族館の特性を充分に生かした生物教室を実施していくつもりです。

探険デー期間中は、この他にも、クイズオリエンテーリングやアニメーション



の上映、カマイルカ「カール君」のデビューを記念したプレゼントの抽選会などが行われて、「いつもより、じっくりと観ることができて、楽しかった。」と、好評を博しました。

(伊藤 圭)

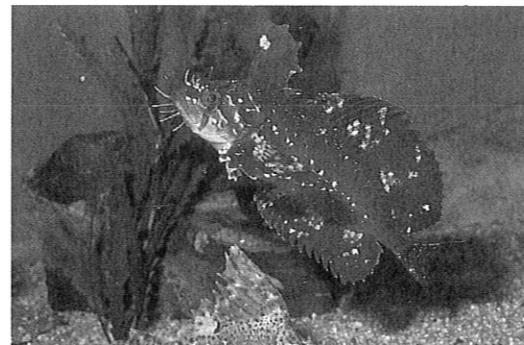
～浅虫の海の生物たち～

(9)イソバテング *Blepsias cirrhosus*

冬の間荒れていた浅虫の海も、春の訪れと共に穏やかに風ぐことが多くなり、漁師の方から「サチコ」が取れたという連絡を受けるようになります。「サチコ」とはイソバテングの地方名で、開館当初はいった何の魚のことかわからず、実物の魚を見てようやくわかった次第です。

イソバテングは体長20cm余りになる、北日本(宮城県・福井県以北)の沿岸にすむカジカ科の魚です。魚彩は地味なのですが、大きな鰓を括げて泳ぐ姿は大変優雅なもので、普段は海藻の中にじっとしていることが多い、その色彩のため見つけるのはなかなか難しいのですが、見つけてしまえば動くことがあまりないので採集は簡単です。

青森では5月頃に産卵期を迎え、卵で腹をぱんぱんにした雌も水族館に入ります。産出された卵は直径3mmと大きく橙色をしており、孵化までに230~250日もかかりますが、これは夏期に水温が



15~20°Cを超える頃、発生が一時停滯するためです。親を飼育していても産卵期が終ると、餌を食べるにもかかわらず次々と死んでしまいます。青森で潜れる6~11月の間、海の中で親を見かけることはなく、出会うのは10cm以下の子供ばかりなのはこのためでしょうか。産卵期の終了、水温の上昇により移動してしまうのか、死んでしまうものなのか、彼らの生態・生活史はまだあまりわかっていないのが現状です。海の中には身近にいるものでさえ、その一生が知られているものは大変少ないのです。

(杉本 匠)

浅虫水族館日誌抄録

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|---------|--|
| 5 . 1 | 白糠にてゴマフアザラシ保護搬入 | 8 . 13 | 天壳島よりウトウ搬入 |
| 13 | 読売新聞イルカについて取材 | 24 | 須磨水族園へマボヤ搬出 |
| 16 | 臼尻よりマダラ・ニシン他搬入 | 9.6~7 | 日動水海獸部会(小樽水族館)「バンドウイルカにおける環境馴致と血液性状について」(伊藤)「海獣類の飼料に関する調査について」(阿部)発表 |
| 18 | 毎日新聞カワウソ取材 | 13 | 上野水族館よりデンキウナギ搬入 |
| 19 | 平館よりイシナギ搬入 | 19 | 八戸・大山氏よりチュウゴクオオサンショウウオ受贈 |
| 20 | 江ノ島水族館よりネコザメ他搬入 | 28 | 和歌山県立自然博物館よりウミシダ他搬入 |
| 21 | 上野水族館へサケビクニン他搬出 | 30 | A T V ホームミラー出演 |
| 31 | 和歌山県立自然博物館へ津軽綿搬出 | 10 . 5 | 東海大学海洋科学博物館よりハオコゼ搬入 |
| 6 . 10 | 佐井よりヒラメ搬入 | 11 | 平館にて乗船採集チダイ他搬入 |
| 12 | よみうりランド水族館へマボヤ他搬出 | 19 | 上野水族館より熱帶性海水魚他搬入 |
| 14 | R A B 青函博用クイズ収録 | 21 | 大畑よりヤマメ・ニジマス搬入 |
| 21 | 今別よりカスザメ搬入・R A B 取材 | 23 | 十和田湖水族館よりヒメマス搬入 |
| 23 | A T V アザラシ・ベンギン他取材 | 25 | 油壺マリンパークよりホシエイ・ピラニア他搬入・マダラ・ホッケ他搬出 |
| 27 | N H K イルカトレーニング風景収録・A T V アザラシ他収録 | 26~27 | 日動水族館飼育技術者研究会全国大会開催 |
| 28 | 鶴川シーワールドヘオオカミウオ搬出 | 11 . 4 | 上野水族館よりチョウチョウウオ他搬入 |
| 30 | クイズハウスマーチ・R A B 県政の窓収録(7月7日放映) | 8 | 十和田湖水族館よりヒメマス他搬入 |
| 7 . 2 | コツメカワウソ搬入 | 15 | 男鹿水族館よりウスメバル搬入・上野水族館よりスズメダイ他搬入 |
| 4 | 鶴川シーワールドより熱帶魚搬入 | 16 | 男鹿水族館ヘイシナギ搬出 |
| 5 | ウミガメ表のプールへ移動 | 24 | 志摩マリンランドヘトラザメ他搬出 |
| 6 | 江ノ島水族館ヘイトヨ搬出 | 12 . 6 | 志摩マリンランドよりイセエビ他搬入 |
| 7 | 須磨水族園よりカブトガニ搬入 | 9 | 油壺マリンパークヘイトウ搬出 |
| 9 | 小湊よりニホンザリガニ搬入 | 14 | 上野水族館より熱帶魚搬入 |
| 11 | N H K 旭川ウトウ捕食シーン収録 | 12 . 18 | 油壺マリンパークよりイトヒキアジ他搬入 |
| 13 | ネズミイルカ展示開始 | 21 | 男鹿水族館よりハタハタ搬入 |
| 20 | 十和田湖水族館よりウシガエル搬入 | 23 | 上野水族館より淡水魚搬入 |
| 22 | 白糠よりスルメイカ搬入 | 28 | R A B ハタハタ・潜水清掃取材 |
| 23 | 5周年記念式典開催・R A B 取材 | | |
| 29 | F M 青森取材 | | |
| 8 . 1 | R A B イルカ・アシカショー取材 | | |
| 12 | 入館者 200万人達成 | | |

動物紳士録

バンドウイルカ

Tursiops truncatus gilli

太平洋にのみ分布し、特に北太平洋に多く、日本近海では暖かい海に生息しています。

成長すると、体長、3.5m、体重、400kg位になります。

自然界では、魚やイカを好んで食べています。当館では、サバやホッケを切り身にしたものと、1頭に1日、12~13kg与えています。

性格はおとなしく、人によく慣れ、色々な物に興味をもちます。そして、仲間どうしで話し合ったり、お互いに助け合ったりします。しかし時には怒って、他のイルカを威嚇したりすることもあります。また、イルカ君達の訓練の成果



を皆様にご覧いただくためにショーを行い、バンドウイルカのダイナミックなジャンプにたくさんの拍手をいただいております。



ハコネサンショウウオ

Onychodactylus japonicus

本州と四国の山地に分布しています。写真の個体はまだ幼生で、頭のうしろにはエラを持ち、そして指先には黒い爪があります。約2年間、水中で生活した後に変態し、陸上生活に入ります。ただし、大人になっても肺を持たず、主に皮膚呼吸をします。



コロソマ

Colossoma macropomum

南米アマゾン川流域に生息する大型の淡水魚で成長すると全長1mに達します。雑食性で、臼状の歯と強力なアゴによって水面に落ちた木の実なども噛み碎いて餌にしてしまいます。現地で漁獲される魚の中では最も美味しいものの一つと言われ重要な食用種となっています。

表紙説明 コツメカワウソ

餌のアジを食べ終わると、すかさずお気に入りの麻袋ベッドで昼寝と酒落こみます。しかし、かすかな物音にも敏感に反応し、聞き耳を立て、あたりの様子を探ります。

詳しくは本文1~2ページを参考にして下さい。

マリンスノー No.9

1989年3月発行

編集兼発行人

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-34 青森市浅虫字馬場山1の25
TEL 0177-52-3377